対人援助職としての保育士の可能性　2
― 乳児院・児童養護施設での保育士業務から見えるもの ―

柴　田　長　生

1　はじめに

昨今の子ども家庭状況の複雑・多様化に対応できるために、「保育所保育指針」は、保育士に対して、子ども一人ひとりの情緒の安定を図り、人間関係の育成を支え、さらに保護者支援など、多方面にわたる対人援助職としての専門性の確立を求めた（厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 2008）。保育士は、ソーシャルワーカーや心理セラピストではない。しかし保育士は、それぞれの職場での勤務の中で、多様なニーズに対する対人援助職としての保育士固有の専門性とは何なのかに気づき、そのことに基づいて実践している。そして、実践を通して培った気づきが「実感を伴って」「腑に落ちて」保育士の中に定着し、それが職域内で継承されていく時、向上されるべき「保育士固有の専門性」が各保育現場に担保されるのであろう。保育士に求められる専門性とその向上を考える際に、各保育現場や保育士の中に定着していく「実感部分（コンテンツ）」を知り、それを共感的に共有していくことが、「求められる専門性の認識と、その向上」に寄与できるための大きな方法論とならないだろうか。

先の論文（「対人援助職としての保育士の可能性（試論的検討）」2010）において、児童相談所一時保護所および婦人相談所保護所の保育士 2 名に対して、「対人援助職としての保育士の可能性を知りたい」という目的を予め伝えた上で、①保育士の業務　②勤務先の保育士業務　③対人援助職としての保育士業務　④緊急保護業務が主体である保育任務　の 4 点について、日頃思っていることを自由に聞き取った。そして聞き取り内容に基づいて、対人援助職としての保育士の可能性に関する考察を試み、①保育士が関与する「対人援助場」の構造　②対人援助者としてのセンス　③保育士や保育業務の専門性のさらなる向上　④対人援助職としての保育士の可能性　に関する知見を得た。

先の論文でも触れたが、保育士が従事する職域は多岐にわたる。拙稿はその続編であり、その広汎な職域から、乳児院と児童養護施設に勤務されている 3 名の中堅女性保育士の聞き取りを行った。勤務先はいずれも入所型の児童福祉施設であり、子どもは親から離れて施設で生活している。また、施設への入所理由は様々であるが、家族や親子関係の中などに存在する様々な課題に対する支援のための入所であること（児童養護施設では、入所児の 53.4％が虐待経験を有する）、入所理由を知らされていない子どもがいること、入所後の課題解決の進捗や親子関係の良否は様々であること、家庭復帰の見通しの立たない子どもが少なくなく、場合によっては長期間の入所に至る場合もあることなどをまず押さえておく必要がある。そのような状況の元で、集団生活を通しながら「子どもの

育ちのいとなみ」を行っているのが、今回話をお聞きした保育士の業務である。彼女らは、社会的養護の中核業務の担い手であると言い換えることもできるだろう。

2　検討方法

乳児院保育士1名、児童養護施設保育士2名（いずれも女性）に対して、表1の聞き取りガイドラインに従って、印刷した表1を見せながら、約1時間程度のディープインタビューを行い、その様子を録音した。各施設は地方都市に設置されている。乳児院・児童養護施設における保育士業務について、ある程度の内容を語っていただきたいという趣旨から、いずれも中堅クラスの保育士に聞き取りを依頼した。聞き取りは、必ずしも聞き取り項目のみにこだわらず、自由な会話形式で実施した。聞き取った内容は筆者が要約し、要約結果に基づいて考察を試みた。なお、聞き取りガイドラインは、先の論文で使用したものとほぼ同一の内容である。

3　聞き取り結果

3名の保育士から聞き取った内容は、おおよそ次の通りであった。聞き取りは「聞き取りガイドライン」の各項目の順に進めたが、自由に展開する話の内容を深めるために、筆者がその場に応じた質問をしている。自由に行った質問の方向とおおよその内容は、以下の文章の（　）内に含まれている。3名の話には、入所型施設における「子どもを育てるいとなみ」のエッセンシャルな部分が豊かに語られていると思われたので、長文になってしまったが、できるだけ

表1　聞き取りガイドライン

質問1　保育士の業務

保育士の仕事（業務）というのは、一般的にどのようなものだと思われますか。

質問2　勤務先の保育士業務

① 今のポジションにおける、「保育士としてのあなたの仕事（業務）」は、どのような内容ですか。
② それは、保育士として「特殊な業務」でしょうか。
③ あなたの今の業務の中で、保育士として、どのような事柄に（何に）対応されていると思われますか。
④ 今の仕事の中で大切にしたいと思っておられることは、どのようなことですか

質問3　対人援助業務としての保育士業務

① 「対人援助」という視点から振り返ると、保育士としてのあなたの今の業務は、どのようなものだと思われますか。
　先ほど質問2でお聞きした①～④の事柄を、「対人援助」というキーワードから、あえて振り返り直してみて、お話ししてください。
② あなたの今の業務における「対人援助者」としてのポイントは（大切な事柄は）、どのあたりにあると思われますか。
③ 今お聞きした「大切な事柄」は、どうして「大切である」と思われるのですか。具体的な事例やエピソードを通して、お聞かせください。
④ 「対人援助」という視点から、今の業務において「大変なこと」「御苦労されていること」「課題」などをお聞かせください。

質問4　社会的養護が主体である保育任務

最後に、「社会的養護」ということから、あなたの今の業務を振り返ってみてください。
また、このインタビューを通して、お話し足りないことがあれば、何でもお聞かせください。

聞き取り内容や文脈などを損なわない形で以下に掲載する。

a　乳児院・A保育士から聞き取った内容

（保育士の仕事）

子どもと、保護者を含めて家庭を支えるのが、乳児院の保育士としての仕事だと考えている。子どもだけを見ているのは簡単だが、ゆくゆくは子どもを家庭に帰すので、入所中に家庭の基盤を作っていく（立て直す）。子どもは、親よりも保育士の方によくなつくので、子どもが実親と「切れない」ようにしていくことが大切。親支援では、親の更に一つ上の世代も含めて考えるようにしている。

具体的には、とにかく親に乳児院に来てもらうようにする。来訪時の親との何気ない話から、今後のことや、今の様子を親に伝える。父母の思いをとにかく聞く。親に、親子の現状をストレスとして抱えさせないようにする。親の対応は、相談員と共にすすめる。

（子どもたちに対して）

「親代わり」という思いが強い。「親代わり」として愛着を育ててやりたい。乳児期は発達が目に見える時期なので、発達を促してやりたい。

生活を豊かにしてやりたい。ご飯を作るとか、一緒に洗濯物を干すとか、子どもと一緒に生活を自然にさせてやりたいという思いが強い。きゅうりなども一緒に作る。「今日は何本できたかなぁ」などと話しながら、一緒に食べる。子どもたちは喜んで、よく食べてくれる。今はトマトを作っている。生活に密着した毎日を大切にしたい。

子どもは2歳ぐらいになると言葉で返してくるようになるので、「ぼくの作ったの…」と言えるようになる。そんな時は、「毎日お水あげたね」「うれしいね」と言葉で返してやる。どこかで、経験したことが残ってくれたらいいと思う。

（親の話）

なかなか来られない親に関しては、親に対する今後のアクションや、やっていかなければならないことを相談員と一緒に考える。来園をキャンセルされることも多い。来園した親の様子や表情を見ると、楽しんで来たのか、無理して来たのかがわかる。親には、「来てくれてありがとう」ということを心から伝える。親の来園時、親を見て子どもは泣くのだが、「子どもの代弁者」として、親には「本当はうれしいのよ」と伝える。また、「親の代弁者」として子どもにも伝える。一人二役かなぁ。

（今の仕事は、特殊ですか…）

特殊な仕事だと思う。人を支えるということで、子どもだけの成長を促すということをやっていたらよいのではない。親の立場からも見ていかなければならない。

熱が出たら、保育所の場合は親が迎えに来るが、ここでは熱が出ても、入院しても、保育士が全部付き添う。子どもがしんどそうにしているのを見ると辛い。親に対しては、子どもを病気にさせてしまったという思いも生じて辛い。必ず親には報告する。親から「ありがとう」と言ってもらえる時もあるが、「うちの子がうつされた…」とか親から苦情を言われることが多い。保育士の気持ちの中には、葛藤がある。分かってもらうためにまず説明するが、「離れておられるから、お母さんには心配かけるね」ということを一旦自分の心の中に入れてから、その後で親に話すようにしている。

（自分の中の葛藤は…）

保育士自身の思いは、誰にでも話していいも

のではない。しかし、同僚には知ってほしいから、本音を話す。職員に知っておいてほしいことは、記録に残して申し送る。管理職と一般職は区別して、相手に応じて客観的に伝えている。それでも自分の気持ちの収まらないときは、院長に話すようにしている。日々迷っている。若い職員へは、「気になることがあったら、私にも教えて」と伝えている。

保護者は、精神症状を持つ人が多いし、怒る人もいるが、「ああ、そうか…」と思ってくれる人もいる。親も、子どもと一緒に育ててるんだという気になる時がある。

（よかったと思える時は…）

具体的な言葉を、親から話される時。そんな時には、自分の中で自信がわいてきたり、先に向けての意欲が出てくることがある。「ありがとう」という言葉を聞くと、自分の中での支えになる。

保育士の話を聞いてもらえてよかったなと思える時。私は保護者とざっくばらんに話すのが好きだ。難しい面談は苦手。普段の面会の時間が大事。日々の流れの中で、何気ない、親と共に過ごす時間が好き。「ざっくばらん」ということを意識している。

乗ってこない親に対しては、「自分を作って」入っていかなければならない時がある。「よし！」と気合いを入れて、それから親に会うこともある。「言わなあかん。逃げるわけにはいかん」と、気合いを入れることがある。そして、不安が残る時には、院長にメモを残す。

（どうして、そんな風にできるようになられたのか…）

どうしてだか分からないが、今までの先輩の姿を見て学んだ。今、自分が主任になって、気合いを入れてでもやらなければ…、というようになった。先輩が鍛え、見守り、しかってくれたことが、今に活きている。

人が好きだということ、「ありがとう」という思いを大切にしている。

（対人援助という視点から）

こんな私でいいのかなと日々思う。おこがましいと思う。親と対応する時に、自分だけでなく、そこにいる職員みんなで、「こういう風に言おうね」と確認するようにしている。「ここで安心して子どもを育てたいので、お母さんはいつ遊びに来てもいいよ」という自分自身の思いをまず職員に伝えて、職員みんなが「いつでも来てくださいね」と言える環境を作って、それを親に感じていただきたいと思っている。現場では、このように伝えている。

対応の現場では冷汗をかいている。親から「あんな所に…」と思われたくない。親との間があくと、子どもは泣く。親にはまず職員との関係がとれて、その後徐々にでもいいから子どもとの関係が取れるようになってくれればいい。まずは職員と保護者がうまくいけばいい。そんな時、職員はどんな言葉をかければいいのか、ずっと迷っている。せっかくのこの機会を切りたくないと思う。だから冷汗が出る。

母の思いを知りたい、聞きたい、楽になってほしいと思っている。そんな気持ちが伝わったらいいなという思いで母に向かう。しゃべってくれない親がいると、どうしようかと思う。本当に、さぐり、さぐりなんです。話したことで、親の表情がどうなるのか見極めつつ、体の息をうかがうように…。

場合によっては、全く違う話に変える。子どもやお母さんのことは聞かずに、「その服、かわいいね」などという話に変えたりする。とにかく、母から何か聞きたいという思いがある。母がしゃべってくれない時はしんどい。母と共

にいるということが大切。

面会の時、そばに子どもがいると、保育士はその場を離れる時もある。保育士が子どもとずっと一緒におらないほうがいいと思う時もある。そのあたりは、「勘」というか、その場から逃げたいというか…。少し時間をあけたり、おやつを持って行くぐらいしかできないが、母と子どもの間の、何らかのきっかけになったらいいと思う。

前もって、対応できるようなプログラムを作っておくこともある。子どもに、「親の代弁者」として、肩を張らずにやっていきたい。こんな対応で、親子としてつながってほしいが、全てうまくいくわけではない。「今がよくても」とは決して思っていないが、しかし、「今だけでもよかったらいい…」ということを、親や子どもに対して思うことはある。かわいい間に、「かわいい」と思ってほしいという思いがある。このあたりの気持ちが強い。

そのために、私の持っている子どもの情報は、「子どもの代弁者」として親に伝えなければと思っている。親子の間があいているので、お互いに緊張しているからこそ、私がその間に入って…。「泣くのも発達のひとつなんだよ」「賢くなっているところなんだよ」ということを伝えていきたい。親には結構たくさん話す。

子どもが泣いてしまうと、親としてはどうしていいのか分からないので、親との距離を埋める努力をする。親は、心配すると表情が変わる。子どもが泣くことは、親としては辛いので、こんな時にこそ「こうなんだ」と伝える。「次から来ないようにしよう」と感じる親に、「ちがう、ちがう…」と伝える。それによって、次も来ようと思ってくれる。

子どもはしばらくは泣くので、来られた時は付きっきりになる。子どもは職員にしがみつくが、少しずつ親にふれあってもらうようにもっていく。

（子どもへの影響は…）

「お母さん来てくれて嬉しかったね」と、日々子どもに伝えるようにしている。こんな事が子どもに伝わるのは時間のかかる作業だが、それでも伝えていきたい。やはり親子なので。少しずつでも、親子で共有できる時間を作るための努力をしている。しかし、親子が施設を巣立っていくと涙が出る。でも充実感はある。こんな親子は、また連絡してくれることもあるから…。

（大変なこと、今の課題）

子どもを育てる中で、職員の考え方が年々違ってくるが、それをどうひとつにしていけるかが課題である。私が伝えることもあるが、管理・指導職が役割分担することで伝承していく。職員間でずれることもよくある。これが子どもに反映する。乳児院は「家」。その中で大人がゴチャゴチャしていたら、子どもは楽しくない。子どもは大人の状況や表情をよく見ている。「家」は子どもを育てる場だと考えたい。その上で、子どもに関わるひとつの姿勢を持っておきたいと思う。

（社会的養護という観点から）

子どもを取り巻く親や社会が随分変わった。社会の流れ、みんながギスギスしていると思う。昔は子どもたちが自然で、のびのびしていたと思う。表情のない子が増えてきた。乳児院で発達や親子関係を取り戻して家庭へ戻すが、そこがまた心配で…。本当に親が取り戻してくれるのだろうかと…。家庭へ戻すことで新しい虐待を生まないかと心配する。今までネグレクトで放置されていたから、家庭に帰った後に手を出されていないかと心配する。自己中心的な親に、「子育て」を伝える時に、私に力がないなと日々

思うことがある。子どもらしく育ってほしいと思うので、子どもとの接触を豊かにする。それで、子どもは子どもらしくなってくるのだが、それが果たして先の幸せにつながるのか心配になる時もある。しかし、子どもがここに居続けることは、もっと大きな問題だと思うので、迷うことが多い。子どもがみるみる変化することは本当に嬉しいことなのだけれども…。このあたりの保育士の理不尽な気持ちは、児相の先生にそのまま伝える。

児童養護施設と違い、乳児院は年齢が低いので、乳児院は親と子どもを守り、愛着を作る場だと思う。

b　児童養護施設・B保育士から聞き取った内容

（保育士の仕事）

私は、保育士になりたいと思っていた。保育所の保母か幼稚園の先生のイメージだった。子どもたちと一緒に、設定保育を行うというイメージもあった。施設の仕事は、子どもの生活を支えること。私は子どもから教えを受けることも感じる。「子どもと一緒に生活する」中で、大人として、保育士として子どもを支える仕事。保育士の研修で学んだことや私が経験したことを子どもたちに返す。これが子どもの力や支えになればいいと思う。

（支える生活の中身は…）

例えば宿直勤務の時は、何かあった時にすぐに動かなければならないので、パジャマは着ない。しかし、幼児棟で一緒に寝泊まりしていた時、園長から「幼児と寝る時は、パジャマに着替えて寝ろ」と言われた。それが日常の当たり前の生活だからである。化粧をする、出かけるときにはきれいな服に着替えるといったことを、子どもとともに私がしないと、子どもにとっては「これが普通の生活だ」と思ってしまう。生活のTPOを一緒にやる。例えば、スリッパはなぜそろえなければいけないかとか、ベッドに入る時は足をきれいにするとか。こんな当たり前のことを、他者から変だと指摘される前に教えること。生活習慣を身につけるということ。お箸の持ち方なども…。子どもたちが恥ずかしい思いをしないために。ルールを守ることも、他者に迷惑をかけないことも知らせていく。子どもに分かってもらえるようにする。

（伝えてやりたいことは…）

保育士は子どもと一緒に遊んでいる、子どもを抱きかかえるというイメージがある。生活習慣を伝える中で、子ども毎に同年齢であっても成長の速度が違うので、その子に応じて関わる。発達の個人差を保育士として学んだ知見から考える。

保育所と施設とでは環境が違うだろう。施設にやってくる実習生は保育所保育士をイメージして来るが、保育所は家庭が基本で、子どもは家庭へ帰っていく。児童養護施設は、家庭から離されて、施設が今の居場所であるので、その中で子どもは生活しているから、背負っているものが違う。そこから接していかなければならない。小さくてもいろんなものを背負っている。子どもへの対応は、その背景を含めてどう接していくかを考えなければならない。

一人ひとりが違うということが大前提。ここは保育所も一緒だろう。このことを頭においてやっていくというのは、どこの保育士でも一緒だろう。

（一人ひとりを大切にするために、何を…）

人数が多かったらうまくいかないかも知れない。私が担当する児童は、それぞれに入所理由も違うし、今その子が家庭からの援助を受けられるかどうかも違うので、そこを押さえること

を基本にしている。それによって、ある子の場合は、休みの時にどこか行こうかと声をかけたり、別の子の場合は学校へ行けるかどうかを気にするし、別の子は社会に出る直前なので、子どもの要求を聞きつつも、これからは一人でやらないとダメだということも伝える。買い物する際の見通し、病院のかかり方などができるように…とか。一人ひとり、その時々でちがう。子どものことをよく知らないと、対応がうまくいかない。しかし、一緒に生活していると、その中で、どうしていかないとだめかということが分かってくる。

（今の仕事は、特殊ですか…）

特殊だとは思わない。大事さや、やりがいはどれでも言えるが、現在の仕事は「なくてはならない大きい仕事、ないとだめな仕事」だと思う。家庭で父母がいるのが基本だが、欠けている子も多くいるので、保育士は子どもに寄り添って、一緒に、（保育士の資質はやさしさなので）やさしく寄り添って、抱きかかえてあげられる存在だと思っている。

かつて幼児を担当していた時、ある入所児の母親に真剣になりたかったことがある。本児が私のことを「かあちゃん」と呼び出したが、真剣に本児がかわいかった。園長は「アホなこと言うな」と叱咤したが、その頃は「施設の職員は、真剣にやったら親になれる」と思っていた。今は、いくら頑張っても親にはなれないと分かるが、あの当時は私になついていたし…。

皆の親にはなれない。別のある子は、その親に対して「かあちゃん（＝私）と一緒に＊＊＊行った」と話したことがある。その子は本当の親がいることが分かった上で、私のことを「かあちゃん」と呼ぶ。「かあちゃん」と呼ばれたことが嬉しいかといえば、その頃は複雑だった。例えば幼児健診に連れて行った時に、子どもが「かあちゃん」と呼ぶので、保健師が私に親に対する様な説明をし出した時、必死で「ちがいます」と説明したこともあった。今は、そう呼ばれることが反面嬉しいが、責任も重くなったと感じる。保育士はおかあさんではないが、気持ちをくんであげられる人でありたい…と。いくら頑張っても親にはなれないから、逆に「じゃあ私は何をしないといけないのか、何を頑張らなければいけないのか」と考えるようになった。

私は、何も分からないまま施設に就職した。すぐに辛くなり、「もう辞める！」と思った。子どもは踏み込んでくる。「親でもないくせに」「給料もらってるんやろ」と子どもたちは言うが、この子らは一体何言ってるんだろうと思った。こちらも腹が立って…。その時は子どもの背景を考えるゆとりなどなく、ひたすら自分のことだけを思っていた。

（今の仕事の中で大切にしたいこと）

子どもたちとのつながり。今、ここでできること、子どもたちと出会っているから、それの積み重ね。これがお互いにわかった時はとても嬉しいし、それがバネになって次に進める。その子とのつながりも、そこで強くなってきている。

つながり、一緒にということは、私だけでも、その子だけでも、私とその子だけでもできない。ひとりでやっている仕事ではないから、周囲がいてくれてはじめてできる仕事である。

（対人援助という視点から…）

「支える」ということ。その子がくじけそうになった時。私が言葉をかけたり、一緒にいたり、困った時に助けられることは、子どもがたよってくれる関係がないとできない。その子が次に踏み出していけるように、私が何かできることをする。これが役割。歳を重ねても必ずし

もうまくいかないことも多いが、マニュアルではなく、私の経験や考えでやる。

自分が悪いことをしても謝らない中学生がいた。はじめは、「これで平気なのか」と思っていたが、この子は社会に出て行けば損をするので、「謝れ」と言っても頑固に謝らなかったし、自分の要求のみを押し通す子だった。その子について「これからは自分でやっていかなければならないから、自分で考えて、自分で何かができるようにしないとあかん」と思った。この子は、例えば外へ出かける時に送迎してくれない職員へはボロカスだったが、「それは違う」と少しずつ話し続けた。遠くの学校へ出かけなければならない時に、「往きは送ってくれたら、帰りは何とかするから…」と言い出したことがあったが、この時帰路は長時間かけて歩いて帰ってきた。このあたりからこの子と話をすることができだした。別の時、この子らには自力で出かけさせたが、同じ所へ出かけた別の棟の男児は送ってもらった。その時この子は私に、「男の子ら送ってもらいよった！」と訴えたが、「ずるい」とは言わなかった。私はその子らと一緒に「本当に、男の子ら甘えとるな！」と一緒に本音で話した。そんなことで共感できることがあり、徐々に自分のみを主張することがなくなった。少しずつ進歩してきている。要求は出すが、「私は、あんたがやりたいことで反対したことあるか」と言うと、「ない」と言ってくれた。反対はしないが、「これはこうなんだ」という話はする。

私に迷いがあるのは、「私はあんたのことを信じてるから」とよく話すが、それをたくさん言うことが果たしてよいのかどうか。その子に対してプレッシャーにならないか、と考える。「もう高校生だから、そんなことわかるやろ」と言った時、高校生になったこの子から、「それが重荷なんや」と言い返された。「何でもかんでも高校生って」「高校生やからって、できるわけない」「その言葉がうっとうしい」と言われた。一週間後に和解できたが…。

格好よく「あんたを信じる」と言うが、私が信じていない子にはそれが言えない。私とその子の関係は、どれぐらいなのかということを考え、関係の浅い子には慎重に言葉を発する。軽々しい言葉はだめだと思う。

（子どもに対する信頼の尺度は…）

これというのはないが、今ここで、きちっと話さないとだめだと感じる私の勘…！？。子どもも私とのことで、何か思っていて、私には話さなくても誰かに話している。そんな私への何らかの思いが間接的に伝わってくる。他の職員にわざわざ大きな声で私に気付いてほしいことを言ってみたりする。私のことは、子どもらには分かりやすいみたいで、すぐ顔に出るらしい。

周囲から、「動物的」と言われることがある。理論じゃなくって、勘所というか、私は思いつきで動く。はずれの時はとても落ち込む。私は、子どもの前で泣いたらだめだとずっと思っていた。昔は「なめられたらあかん」とも思っていた。でも、悲しかった時、幼児担当の時、よく泣いていた。友人からは、悲しい時は泣けばいいと言われた。泣くことが恥ずかしいことではないと思えてから、私はすごく泣くようになった。子どもらも、私が「泣きむし」だとわかっている。人は、いろんな時に涙が出るということを、私なりに子どもに伝えていって…。子どもが万引きをした時は、悲しくて涙が出る。苦しくって蔭で泣いたこともあったが、時がたって「そんな時もあったのだ」と思い返すと、また泣いて…。自分をある程度出さなければ、子どもも出さないと思う。大人ゆえに素直になれない時もあったが、今では私の方から「ごめん」「ありがとう」が言えるようになった。

実習生の中に、「話してあげよう」「注意しないとだめだ」と思いこむ学生がいるが、学生には、子どもの良いところ・すごいところを、言葉で返してあげてくださいと伝えている。それは自分への戒めでもある。子どもを認めてあげられることを、言葉で返すこと。一緒にいて、一緒に気付いて…。子どもも自分のことだけで精一杯だから。

（親への援助は…）

「親とのつながり」ということでは、子どもが施設にいる間は「よく思われてない」と感じられることがあっても、子どもが家に戻った時に、いいつながりになるケースはある。子どもとの関係を切る所まで来ている親もいるが、どうしたらいいのかな…と思う。関係者の中で一番大きな存在は、児相ではなくて親だと思っている。親と施設との関係がうまくいってなかったら、子どもへの援助はうまくいかない。施設生活は成り立たない。いろんなケースでそのことを思う。

子どもとの関係の次に、親との関係。家族の中には、施設職員といえども土足で入ったらだめだと思っている。そこまで踏み込んでいいのだろうかという線はあるんだろうし、その線を越えてしまっているケースもある。親と近くなっていくというか、関係を築いていくこと。初めは少しずつ、職員だからと割り切ってではなく、しかし、踏み込みすぎず…。

子どものためにと思ってやっていることが多いが、シビアなケースの場合などは、親のために何かできないか…と思うことはある。一般的には子ども中心になるが…。入所期間の長いケースでは、来られた時よく話を聞いたりする。中学入学時点が家庭引き取りの節目として引き取りを考えることはあるが、そんなに機械的にいくものではない。2歳に入所して中1になった子。6年の時に帰りたい気持ちがあって、揺れていた。児相へは、「入所時点での入所理由と、今の入所理由は違うが、子どもは納得していないから、今調整してほしい」と伝えている。

今、ショートステイで、母子家庭の2歳の子を受けている。朝に迎えに来るはずだったのが、迎えは夜になってしまった。お迎えに親が来た時、その子はニコッと笑った。子どもにとって、親はすごい存在だとまた思った。子どもは、親のことや、親が引き取れない理由を、「今はいそがしいんや」と美化し、現実とずれていても、プラスイメージを作って自分で受け止めようとする傾向がある。そんな子の思いを、親は知ってるのかなと思う。そのことを、子どもの立場で、子どもの代理で親に伝えるが、それで親が引いてしまうようなこともある。子どもの生活の中で、ため息つくことはいっぱいあるが、それと同じぐらい親に対してしんどいことがあり、どうしたらいいのかなと思うことはたくさんある。信頼関係ができたら、引き取りができるかと言えば、そうでもない。むずかしいが、それも積み重ねだと思う。

（社会的養護という観点から…）

社会的養護ということで言えば、ここの地にこの施設があって、子どもたちが施設ということですごく「マイナス」をかかえて、私たちもあえて表に「施設」ということを出さなかった。前理事長は、あえて施設ということで前へ出ていかないとだめだと言った。でも、子どもの立場に立つと、施設に入っているということで、周囲から「言われる・言われない」は決まるだろう。

私が幼児の担当になった時に、公立幼稚園に子どもを通わせ始めた。子どもたちは、施設生活の中で、「今から設定保育やりますよ」とやり始めたとしても、いきなり場面を切り替える

ことができないだろう。外へ出て行って、交流してこそ…。幼稚園では他のお母さん達と顔見知りになった。PTAにも出て行った。他のお母さん達は、偏見を持つ人もいるが、理解してくれる人もいる。施設はかわいそうな子ばかりがいるところといったマイナスのイメージで、同情ばかりで見る人もいるが、みんながんばってるんだ、普通にやっているという所を知ってもらわないとと思って、お母さん方と交流させてもらったり、サークルにも入ったりしていた。後日そのお母さんと中学で出会うことがあって、「やあ、まだおられるの…」いう話になったこともある。

施設へはいろんな理由で入ってくるが、子どもたちががんばっているところは見てもらいたい。子どもたちは他の子と同じだということを知ってほしい。そのために地域の人との交流が大切だと思う。施設が地域への恩返しとして何ができるのかと考え、地域との連携やショートステイの受け入れなどをやっている。グランド開放も…。これらもどんどんやっていかないとと思う。地元の理解がないとやっていけない。隠してばかりでなくて、出て行かないと。社会の中で子どもを育てていく、ということなんだし。今の制度変更の動きにもついていかないと、と思う。

c　児童養護施設・C保育士から聞き取った内容

（保育士の仕事）

保育所は保育に欠ける子どもが行くところ。施設での仕事は、大きく言えば、「子どもを育てる」ということ。その中に細かいことがいっぱい詰まっている。しつけ、勉強、自立、将来への見通しなど、そこまでのトータルなところに関わる。母親的存在として子どもに関わること。

（保育所との違いは…）

保育所の時は目に見えて「保護者」がいた。子どもも保育園へ登園し、帰って行く。保育士はそこにいる「先生」であり、時間限定の関係。施設では、生活、それも24時間関わるし、保護者にはなれないが「親がわり」である。保育所とは根本的に異なる。それだけ、その子の人生に対して責任があり、それは重い。

（現在の仕事は…）

子どもと「生活を共にしている」という感覚。「子育て」をしているという感覚。嬉しい時は一緒に喜び、悲しい時はその思いに心をはせ、いけない時は叱り、うまくいった時は十分にほめる。そんな「日常の生活」の中に私の仕事はあると思う。

例えば食事場面では、複雑な家庭環境から施設に来た子が多い中、偏食・マナーなど、身につけてほしいことがたくさんある。しかし、注意ばかりになるのも楽しくないので、おいしく楽しい食卓にしたい。また、そんな食卓の一場面でも、子どもと一緒に料理を作ったり、盛りつけをしながら、「自分だけではない」「生活を共にしている人たちがいる」ことを思いながら、他の人の分もお茶を入れてあげたり、お皿を片付けたり、テーブルを拭いたりしながら、自分のできることはたくさんあることも感じ取ってほしいし、身につけてほしい。自立に向けて、「自ら動ける人」になってほしいと願う。

「自分だけがよかったらいいわけではない」ということを子どもに感じ取ってほしいと思っている。嫌いなものでも、ちょっとでも食べようと促す。食べながら、話をして「旬」を教える。日常生活で大切だと思うところを伝えたい。外から帰ってきた時に、しっかり手洗い・うがいにも気をつかう。爪が伸びていたら「ちゃんと切ろうね」と言ったり、小さい子は切ってあ

げたり、耳掃除をしたり、普通の「生活」をしている。

子どもらが落ち着いて何かに取り組める時間が大切だと思う。夜はゆっくりと、オフタイムでくつろげるように、時間・空間を一緒に過ごしたい。夜寝る前、一緒に本を読んだり、話をしたりして、子どもが穏やかな気持ちで眠れるようにしたい。子どもが一日の中で一番素直になって、甘えを出せる時間なので、その時間を大切にしたい。施設の保育士は、生活を共にし、生活を支えていく人。そこに専門性が求められる。

（子ども以外の仕事は…）

各保護者の対応をしている。なかなか連絡の取れない親も、児相と協力して連絡取るようにする。どんな状況にあっても、親のことを思っている子どもが多い中、子どもの様子を親に伝えたり、行事や帰省の連絡を入れ、調整する。関係が切れてしまわないように、保護者としての意識は持ち続けてほしいと願う。

学校との関係では、学校側は「施設」として見ているかも知れないが、保護者のつもりでやりとりしている。学校がどう思っているのか…というのはある。保護者としてのスタンスと、施設職員としてのスタンスと、両方あるというジレンマがある時もある。しかし、施設に戻れば、子どもへは母親的に関わる。「こんな電話が学校からあったよ」と、よいことも悪いことも伝え、話していく。

保護者との日程調整をする。子どもは虐待されていても、放置されていても、やっぱり親がいいのだろうと思う。入所一年未満の子で、家には帰りたがらない子でも、本心はやはり家のことが気になっている。こっちから連絡してもつながらなかったら、子どもは「何してるのかな」と言うから、やはり気にしているのだと思う。今は、会わないことも一つの選択肢ではあるが、親との縁は完全に絶ちきることは難しい。また、保護者にも、保護者であることを忘れてほしくない。なるべく子どもと親との関係がうまくいくように…と思う。よほどのケースでもなければ、橋渡しを考える。子どもと親の両方の気持ちや思いを聞きながら、その中でできる策を見つけ出せればいいなと思う。

（大切にしたいことは…）

私の中では、子どもを真ん中に置きたいと思っている。子どもに対しても、自分に対しても、誠実で真摯でありたい。子どもに信頼してもらえる大人になりたい。この人なら信じて行ける人だ、ついて行ける人だと、子どもに思ってほしい。そんな人がいるだけで、がんばる力、踏ん張る力になっていくのではないかと考える。そんな存在になりたい。子どもにとって、どんな存在であるべきかを常に考えたい。

約束を守る。うそをつかない。できることとできないことをいい加減にせずに、できなければ「なぜできないのか」を子どもたちに話したい。子どもが言ってくることに対して、何でも「いいよ」と受け止めるだけでなく、だめな時はだめだとしっかり言える大人でありたい。子どもを真ん中に置きながら、子どもを導く主導権は大人が握って、子どもに考えさせながら一緒に成長したい。

（親に向き合うときは…）

親が高齢で、病気で先の長くないケースがあった。その子にとっては、未来に親との接点が望めない。親戚の人は、「今親との接触を深めたら、里心が付くから…」ということを言うが、入所直後であっても、その子にとっては、これまで住んでいた家が大事で、今まだ家があるなら、今の内に帰らせてやりたい。でも、実

際できることは少ない。今私にできることを探して動くしかない。親の気持ちに寄り添うことも時には必要と考える。悩んでいる親も、さびしい親も、腹の立つ親もいる。親支援が子ども支援につながる。

私は、いつも子どもの側に立ちたいと思うが、例えば「家に帰りたい」という子どもの要求をかなえるためには、親にそっぽをむかれるとだめだから、親とも関係をうまくしていこうと思う。養護施設の子どもは、自分の思いを言葉に表すことができるので、子どもの思いを尊重していきたい。

（対人援助という視点から…）

子どもたちは、表現が下手だと思う。「こんな時に、こう言ったらいいんだな」ということがわからない。このようなことは、小さい時に親の姿を見て育つのだろうと思うが、このあたりがないままの子が多い。「こうすればうまく伝わったり、誤解がなくなったり、あなたのやさしさやよいところが出るよ」といった話を子どもたちにする。しかし、子どもにとっては、このことがなかなかわかりにくい。自分の何がだめで人との関係がうまくいかないのかもなかなかわからない。これをどうしたらいいか、サポートし代弁する。

妙に距離が近すぎたり、逆に距離を遠ざけて関係が作れなかったり、ということを強く感じる。例えば公園で、母の側をなかなか離れられなかった子どもが、他の子と母の手を離れて遊べるようになる。それは、振り返れば母がいる、誰かがいてくれるという安心感が育っていることの証だと思う。そこで安心感を得て、親離れして前へ進めるのだが、この育ちの経過が不安定な子は、後ろを振り返ると、手を伸ばして受け止めてくれる大人がいるという感じがない。安心感のなさ。その子たちに、人との関わりをうまくさせる、チャレンジする心を育てていけることができればいい。

（そのために、具体的にどう関係をとり続けていますか…）

普段、生活を共にしている仲なので、特別のメニューがあるわけではない。

こんな経験がある。クラブ活動している子で、足が痛くて、クラブに行きたくないとゴネた子がいた。私はクラブに行かせたかった。そこで色々話をしているうちに、子どもは自己否定的なことを言い出し、内にこもって、泣いて、「どうせ自分は何をしてもだめなんだ」と言いだした。この後、2時間以上その子の部屋でしゃべった。最初は「何、弱気なこと言ってるんや」と叱ったりもしたが、後はトーンを下げて、「私は、あなたのこと多く知っているし、あなたがいろんな事ができる力があることも十分知っている」「とにかく応援するから、がんばってほしい」ということをずっと話をする。

時には距離を置いたほうがいい時もあるだろうが、私は、その時に、その子と一緒にいることを選んだ。きっと自分自身を情けなく思っていただろうし、叱られても当然と思っていただろう。だからなおさら、その情けなさを一緒に感じる時間を共有する方を選んだ。子どもの心の闇を、本当は何もわかっていなかったのかと自問自答の日々だったが、その子との距離は更に近く感じられるようになった。その時一緒に過ごした時間が大切だったのだと思う。なかなか思うようには進まないが、文句を言いながらも、私の言うことは聞いて動けるようになった。「求めれば答えてもらえる」と「放っておかれない」と、その子が感じ取ってくれた出来事だったのだろうと振り返る。

（子どもが保育士にいてほしい時、その勘所は…）

何となく様子を見ていて、そうなんだろうなと感じる。そんな風に私が思ったら、側にいてやることにしている。（勘所…）分からないですね。私は割と子どもと一緒にいる方だ。今は放っておいたらだめとか、何も言わなくても今は一緒にいるとか、一人にしない方がいいとか。私がいて、この子の心が穏やかになってくれたらいいなとか思うので。でも、そのように思うのは、生活を一緒にしているからだろう。

わかりにくい子どももいる。本当は側にいてほしいのに、憎まれ口をたたく子もいる。それに反応していると、お互いに「知らん」ということになることもある。変わらない大人が居続けてくれるというのがいいのだと思う。だから私がブレたらだめだと思う。子どもによって右往左往したらだめだと思う。

（ブレないために…）

私も自信をなくしたり、不安になることや、私がいて何になるのかと思うことはある。でも、やはり子どもを見るとかわいいと思うし、やっぱり子どもが好きなんだと思う。その気持ちで、悩みも何も…。頭で考えるよりも行動することが先なので…。もっともっと一緒にいる時間を作らないと、と思う。職員室での仕事もあるので、なかなか子どもとゆっくりできないこともあるが、宿直から翌日の夕方までの24時間勤務の時は、すごく心が満たされているように感じる。子どもと一緒に過ごし、より近くに感じられる充実した時間である。それでも時間が足りず、一人ひとりと満足に関われているかというと、どうしても後回しになってしまう子もいるので、どこかで足りなかった時間を取り戻したい。

朝機嫌良く出て行った子、少し不機嫌だった子、帰ってくる時の様子も気になる。だからできるだけ「おかえり」と迎えてあげたい。しかし、私自身の場合は、小・中・高といつも親に「おかえり」と迎えてもらったわけではない。忙しく仕事をしていた親に心配をかけまいと、嫌なことがあっても玄関先で深呼吸をして家の中にはいることもあった。何も感じていない忙しそうな父や母の顔に、何気ない日常に癒される日々も多かった。そんな日常が施設の中でも営まれることを願う。

幼少期はとても大切。「三つ子の魂、百まで」とは、本当によく言ったものだと思う。小さくてもよくわかるし、聞き分けられる。善悪の判断も、自立への第一歩も幼少期、心が育つのも、愛着形成も、何もかも幼少期。ただかわいいだけでなく、しっかりとした大人の関わりが大切。甘えさせることと、甘やかすことの違いを、しっかり見極めることが大切。

（親を支えるということ…）

保護者には、不安定な親もたくさんいる。処遇として、親のために一時帰省させるようなこともあるが、そんな時に若い職員は、「なぜ、今帰すんですか」と言って来ることがある。私も若い頃はそうだった。しかし年を経て、これも許容できるようになったのだと思う。若い頃はがむしゃらで、自分はこの子の親になりたいと思った。今は、子どもは大事だと思う一方で、この子たちがいちばん大事なのは親だということも思うので、この子のためになるのが親とのことであれば、そっちをサポートできる役割をとりたいと思う。腹の立つ親も多いが、親が元気になっていくことが、ひいては子どものためだと思うので、それを思えば我慢というか、「そういうこともあるよ」と自分に言い聞かせる事ができるようになった。しかし、「親が一番」には決してならない。このあたりのことは、施設と児相がもっと話し合って、ケースワークが

うまくとれたらいいなぁと思う。

子どもが親に、「施設の先生が、＊＊＊も、＊＊＊も、してくれた」と話すことで、親は施設を信頼し、安心してくれる。そのことで親のしんどいところ、辛いところを職員にも話してくれるようになる。それを積み重ねた結果、子どもが家に戻り、今でも連絡を取ってくれる親子もいる。親も子も、やはり信頼関係を作ることが第一。しかし、それが一番難しい。

（一人ひとりの違いをどう受け止めるか…）

子ども、一人ひとりですね。大舎制の時は個別になかなか関われない事もあった。しかし小舎になって、本当に子ども一人ひとりと関わりができて、1対1の時間をもてる回数が増えた。子どもが今こうしてほしいということに答えやすくなった。買い物・お出かけにしても、気持ちがしんどい時も、受け止められるようになった。みんなの中では素直になれなくても、1対1でどこかへ出かけることができたり、個別に関わることで素直になることができ、不満や悩みをはき出せて、ちょっと元気になったりすることができやすくなった。施設のシステムの変化が大きい。個が大切にされているという実感を得ることができると、他の子にも優しくできたり、受け入れようとすることができやすくなるだろう。

（大事に思うこと・課題など）

私がどんなに思っても、親にはなりきれない。この先ずっと関わるわけではないので、私の伝えたいことがどれだけ伝わったのかな？と思う。子どもにこうなってほしいと思っても、子どもがそれをどう受け止めて、巣立っていくのかということが気がかり。結局何も伝わってなかったのだろうか…とか。むろん、施設を出て頑張っている子もいるが。とにかく、子ども一人ひとりに「あなたは大切な存在」という事を伝えていきたい。日常の生活を通して、生きる目標や目的を見つけ、自立していける人に育ってほしい。大勢に人に愛され、愛し、豊かな人生を送ってほしい。ただ実際は、社会が、親が、世間が、その子自身が、それを阻むこともある。何が足りないのか。「器」なのか、「時間」なのか、「人」なのか、「資金」なのか…。

（社会的養護という観点から…）

施設は「特別」ではないということを当たり前にしていきたい。それには、施設側も、地域や社会に開かれていくべきだろうし、地域の方にも理解してほしい。地域の行事、ゴミ掃除、作業、声かけ、見守り。子ども同士が、お互いの「家」として行き来し合うこと、高校生のアルバイトなど、社会全体に施設が溶け込んでいくこと、意識改革が必要。

これだけ虐待が世間であっても、知らない人がたくさんいると思う。「施設の子どもって、暗い、こわい」というイメージでまだまだ言われるので、もっと正しく、子どもの姿を理解してほしいと思う。今の子は言わなくなったが、少し前は「中学校の参観日は嫌だから、絶対来ないでほしい」と言う子がいた。施設の子だとわかるから…。それがすごく悲しかった。今は「参観日に来て」という子が増えた。昔とは「子どもの思いが大事にされている」という感覚が子どもたちの中で育ったから、「来て」と言えるようになったのか、どうか！？　若い職員にも「来て」と言える。世間を含めて、変わってきたのかなぁと思うが、でもまだまだ…。

4　考　察

1）インタビューの分析

a 「子どもの育み」を受託すること

入所型施設の保育士の仕事は、「子どもと生活を共にし、子どもを育てること」であると異口同音に語られる。それぞれの子どもの年齢に応じて、それぞれの親に代わって一定期間（成人に至るまでのこともしばしばある）育てるのであるが、「親代わりになる」「親代わりを務める」ということは簡単なことではなかろう。その一方で実の親子関係（子ども・保護者関係）は、施設における子育ての背後にいつも「プライオリティーを持つ実存構造」として子育てを担う保育士について回り、しかもその親子関係は客観的にみても、子どもの最善の利益という観点からも、良好で質の良いものだとはとても思われない実態であるにも関わらず、実の親子関係の優位は動かない。そのようなある意味での理不尽さを伴う「親代わり」を引き受けるということである。ある親子に対して、「メタポジション」を取りながら、その親や子を共感的に理解し、必要な支援を行うのが対人援助職であるのなら、入所型施設の保育士は、親子に対する位置取りも、親子を支援する役割も、上に述べたようなスマートな「メタポジション」は非常に取りづらいだろう。

他方、施設に入所してくる子どもやその親は、必ずしも施設に入所すること（施設で育ち、施設に育てられること）が腑に落ちているわけではない事が少なくない。多くの場合、それぞれの子どもにおける親子関係や家族状況に何らかの行き詰まりが生じた結果、ある場合には福祉機関に介入的に「保護」され、それぞれの親子や家族での養育継続が難しいと判断された後に、児童福祉制度に基づく「措置」を経て、子どもは施設に入所してくる。そのような経過をたどる「保護」の後に始まる、施設保育士による「養育」といういとなみの継続に、「子どもの育み」がゆだねられ、保育士は「親代わり」として子育てを引き受けるのである。このような養育関係は、「担当者」の決定とともに、ある日突然に開始される。また、入所してくる子どもの多くは、家庭を離れた疎外感や、様々な不安、自己喪失感、他者への不信感などを持っている。

家庭の中で育つ場合も、施設の中で育つ場合も、子どもにとって必要な「育ちのための営み」に差があるわけではない。そして施設における「子育てのいとなみ」が、代替え行為であるわけでは断じてないのだが、上に述べたようなビハインド状況から養育が開始され、養育中には絶えず背後の「実親子関係構造の存在」が見え隠れしてくる矛盾が常につきまとう。

聞き取りの中では、自らの役割を「子どもの代弁者」「親の代弁者」「一人二役」というように語られたが、上に述べたような状況や養育者としての役割を、子どもの最善の利益を守るための職として、保育士自らが自分自身をどのように形成してきたかに、この職における大きな専門性の基盤を見いだすことができるだろう。聞き取り内容から、少し抜粋してみよう。

A 保育士は、乳児院の子どもが病気で入院した時に、養育者としてずっと病室に付き添いながら、しんどそうにしている子どもを見るのが辛く、また親に対しては「病気にさせてしまった」という思いも生じて辛く思う。これは、背後に絶えず「実親子関係構造の存在」が見え隠れしてくる矛盾が常につきまとってしまうことがはっきり見て取れる場面である。保育士の二重の辛さの中に、自分との養育関係と現存する親子関係の二重構造がよく現れているのではなかろうか。このような保育士のジレンマに対して、当の親から「病気をうつされた」と非難さ

れると、保育士には葛藤が生じる。「親への説明の際に、『離れておられるから、お母さんには心配かけるね』ということを一旦自分の心の中に入れてから、その後で親に話すようにしている」という自分自身の内面操作をして、直面している関係の二重構造を自らの中で整理して受け止めなおすことを、自らが「意識できて」行えた時、その後の親への対応が「親支援」として活きるのであろう。同様のことは、「この子のためになるのが親のことであれば、たとえ腹の立つ親であっても、子どものことを思って我慢してでもその親を受け止めようと努力し、『そういうこともあるよ』と自分に言い聞かせることができるようになった…」と語るC保育士の心情からも見出すことができる。

関係の二重構造を引き受けていく過程として、B保育士が若い頃にある子の親に真剣になりたかったエピソードも興味深い。日々の子育ては、それくらいのバイタリティーと情熱がないと、子どもたちに響いていかないのであろう。初任者の時にはひたすら自分のことだけを思っていたB保育士であったが、施設における子育て業務の継続は、徐々に「いくらがんばっても親にはなれない」ということを骨髄から思い知らされる道のりとなる。しかし、そこで燃え尽きるのではなく、「それでは、私は何をしていかないといけないのか」ということを「意識して考え続け始める」ことができたのはなぜであろうか。「親になるなんて無理だ」と周囲から指摘され、本当の親がいることを分かった上で自分のことを「かあちゃん」と呼んでくれる子どもがいることに気づいた体験などから、皆の親にはなれないと思うようになった。また、子ども一人ひとりが違うということを感じる指導体験が、「一人ひとりの入所理由や養護背景を考えて子どもに接する」という態度を自らの中に成立させていくようになった。そのような自らの足跡が、施設保育士におけるポジショニングとして、広い意味でメタポジションとしての位置取りを形成することになり、そしてそれが、養育される子どもへの「安心感」を更に醸成することにつながっていくのであろう。

C保育士も若い頃は「この子の母親になりたい」と思っていたが、経験を経ることで「子どもがいちばん大事なのは親だということも思うので、この子のために親をサポートする役割をとりたい」と思えるようになった。施設の中では子どもが一番で、「母親的存在」であることを最重視するが、施設職員として学校へ出向いたり、来園する親の面接に立ち会ったり、関係機関と協議する時には、それぞれに異なるいくつかのスタンスをTPOにあわせて取らなければならないジレンマがある。ジレンマを抱えて各場面での対応を果たしたとしても、入所施設の保育士としては、「子どもと一緒にいてやることをまず優先してやりたい」という子どもに関する思いを自分で意識して選択し、それを最重視しながら様々な状況に応じて自らの役割をコントロールできる形で自らを貫き通せるようになってきているところに、B保育士と同じく広い意味でのメタポジションを形成してきたことを見てとることができる。このポジショニングができてはじめて、施設での子育ての背景ある「実親子関係構造の存在」に対して、子どもの育ちと幸せの永続（パーマネンシー）のために、多少以上の困難があっても冷静に関わろうとする動機付けが生じるのだろうし、ビハインドを抱えた突然の養育を引き受けることができ、実親への思いや、親子関係形成や、家庭復帰の実現を「子どもの喜びと幸せ」という観点から客観的に取り組めるようになるのであろう。

A保育士の乳児院での親子面会のエピソードは、保育士はまるで親子の間で両者の「黒子」

のように振る舞いながら、「親子」双方の代弁者になろうとする。全国保育士会倫理綱領には、保育士は「子どもの代弁者」「親の代弁者」となることが重要で、この役割を通して子どもの育ちを支え、親の子育てを支える。そのことで「子どもが現在（いま）を幸せに生活し、未来（あす）を生きる力を育てる」。以て子どもの最善の利益を尊重する…というような内容が謳われている。これが保育士としての対人援助職としての専門性なのであろうが、親子双方の代弁を実現できることは、ここまで見てきたように生半可なことではない。

このポジショニングが取れるようになるプロセスそのものが、対人援助職としての専門性の確立と、力量獲得のプロセスなのであろう。全国児童養護施設協議会がまとめた「児童養育における養育のあり方に関する特別委委員会報告書」（2008）の中に、「ともに成長しようというおとなに出会うとき、子どもの養育は促進される」という指摘があるが、自らの中に腑に落ちて、「社会的養護状況の中で、子どもの養育を引き受けよう」という自己の態度を形成するまでに至る保育士自身の変遷プロセスと上記の指摘内容は、まさに相似形をなすのであろう。そのために、保育士は自分自身をまるごとその職に賭けることをいとわないと、そのような態度形成は成就できないのだろうか。それほどすごい話を 3 人から聞き取ったと思われた。

今述べたようなプロセスは、養育里親や、養子縁組を経た後の元里親にも当てはまる。しかし、里親の場合はそれぞれが個人単位での養育の営みであるのに対して、施設の場合は、先輩や同僚たちからなる専門家集団が存在する。良質な専門家集団に恵まれれば、それが保育士自身の成長にとって大きな助けとなることも見逃してはならないだろう。

b　養育における、養育者の「勘所」と「支えどころ」

B 保育士は、子どもに関わらなければならないと感じるタイミングや勘所を、「今ここで、きちっと話さなければだめだと感じる私の勘…」と語り、時にそれは周囲から「動物的だ」と評されるという。このくだりだけを読むと行き当たりばったりのような印象を持つが、自分の要求だけを押し通す中学生の対応を考える時、担当としてその対応を継続的に引き受けている点にまず留意したい。うまく行こうが行くまいが、担当者として「不可避」であることを引き受けなければならない所に着目したい。そして、「自分で考えて、自分で何かできるようにならなければダメだ」という養育のゴールを、養育者の側でぶれないで持ち続ける「強さ」が要求される。その中で「それは違う」と話し続ける対峙する態度と、その子が頑張ったのに他児が頑張らなかった時には、その子と同じ地平で気持ちをむき出しにしてでも共感するような関係・交流が、メリハリがきいた形で織り混ざっている。そして、その時々に子どもに対して発する自分の言葉については、それぞれの子どもや様々な TPO において、非常にデリケートにその言葉から生じる意味や関係性について感じ取り、その都度結果を反芻しながら、保育士自身の中で揺れ続けている。このような場合にこうする…といったマニュアルがあるわけではなく、自分の経験や考えで動くのであるが、「子どもが頼ってくれる関係がないと対応できない」というところが関わりのベースラインなのであろう。

先に引用した「児童養育における養育のあり方に関する特別委委員会報告書」の中には、以下のような記述もなされている。

＊

「依存」と「自立」は反対の概念であるが、

人間は依存することによって自立していくという経過をたどる。これは「養育」のパラドックスであり、そもそも「養育」は二律背反的に成り立っている。生きるということは、次々と現れてくる二律背反的なパラドックスの課題について、逃げずにバランス感覚を働かせて、何とか対応していく過程である。そういう過程を受け止め、課題を解くことを歓びとして子ども自身に向き合おうとするおとなに出会うとき、子どもは自分の生を受けとめていくためのモデルを見出すのではないだろうか。

*

B保育士は、子どもとの信頼関係の尺度を語る時に、上で述べたようなエピソードを語り、自分をある程度出さなければ、子どもも出さないと思う、と結んだ。まさに、報告書が述べたパラドックス関係を、逃げずにバランス感覚を働かせて、何とか対応していきながら、子どもとともに成長していく保育士の姿が見える。保育士が「ここ一番」と思える場面で、逃げないで対峙し、あるいは受け止める、そのバランス感覚がまさに勘所なのであろう。

C保育士の、「クラブに行きたがらない子」への対応のエピソードにも、全く同じ構造を見て取ることができる。養育目標を保育士の中で明確に持ちながら、子どもへの自らの態度として「その子と一緒に居続ける」ことを選び取り、その上で逃げない二律背反的な対応を続けている。しかも、日々の対応の結果について、「子どもの心の闇を、本当は何も分かっていなかったのだろうか」と自問自答するように保育士の中で揺れ続けるのであるが、そのことが、子どもとの距離を埋めていく結果となった。C保育士に「子どもが保育士にいてほしい時の勘所」を尋ねてみると、子どもの様子を見ていて、「そうなんだろう」と感じる、そんな風に私が思った時がその時なのだと思う…と語ってくれた。どのようなTPOが「勘所」なのかはよく分からないが、よく分からない子に対しても「その子と一緒に居続ける」ことを選び取ることを優先させることについて、ぶれてはならないという確信があるようであった。それが子どもと生活を共にすることの核心であるというスタンスが、自らの職務信条であるように思われた。

しかし、このような二律背反的な養育対応を行うことの前提として、それぞれの子どもが持つ、個々の自己不全感や社会的成熟の貧困さなどに対する保育士の共感的理解がまず根底に存在することを見逃してはならない。C保育士の場合、そのような共感性があるからこそ、たとえ子どもが自らの気持ちとは裏腹な態度に出ようとも、そのことには反応しないで「その子と一緒に居続ける」ことをぶれないでまず選び取り、関わり続ける。「私の言ったことが、どこまで伝わっただろうか」と心は常に揺れるのであるが、しかし、「その子と一緒に居続ける」ことがやがてはその子をエンパワーしていくだろうということに信頼を置くのである。B保育士も、「その子がくじけそうになった時、私が言葉をかけたり、一緒にいたり、困った時に助けられることは、子どもがたよってくれる関係がないとできない」と語る。受容や共感的理解は、対人援助者の根本原則である。

A保育士の場合は、乳児院勤務であるので、むしろ親との対応の中に、エピソードを見出すことができる。親へどんな言葉かけをすればいいのについて、冷や汗が出るほどの迷いがあるという。親への対応によって「親の表情がどうなるのかを見極めつつ、体の息をうかがうように、探り探りしながら」、揺れる感受性を働かせながら親に対応する。たとえ結果が定かでなくても、親との対応業務を「不可避」なものとして位置づけ、「子どもの代弁者である」というスタンスを定めた上で、目前の親や親子に対

して様々な距離感を働かせた対応を行う。しかし他方で、むしろ保育士が優勢に語って聞かせたり、子どもを避けようとする親に対しては、「ちがう、ちがう」と親と対峙する事も避けない。きっと経験則による対応法のバリエーションが蓄積されているのであろうが、その時保育士がどう動く事を選ぶかは「勘である」とも語る。また、関係形成がうまくいかないような親に対しては、その親から逃げないために心を決め、まず「自分を作って」、そしてその後気合いを入れて、親との肯定的な関係形成をめざそうとすることもあるという。B・C 保育士の子どもへ向き合う場面の例とは少し異なるが、現在の養育者と、実親子関係の間のパラドックス状況に対して、避けずにどう向き合うかという場面だと了解するならば、そのことを引き受ける際のバランス感覚や、勘所のようなものや、その際のセルフコントロールなどが語られているように思われた。

c　親支援に対するスタンスの差

「対人援助」というキーワードで 3 名の保育士にお話を伺ったが、乳児院の A 保育士の話はむしろ「親とのやりとり」に力点が置かれたのに対して、児童養護施設の B・C 保育士の場合は、まず子どもとのことが中心に語られた。在籍する子どもの年齢や、子どもの在園期間、あるいは施設業務の実態などを考えると当然の結果なのではあろうが、その差異は印象的であった。児童養護施設の場合、親元に戻れる見込みがなく、成人として自立できるところまで何とか育て上げなければならないという「重い責任と自覚」を持たなければならないケースも少なくないので、なおのこと処遇の力点は子ども中心になるのであろう。

児童養護施設における親対応が不十分だとは思わないのだが、保育士の中には、「保育士は決して親にはなれない」という強い認識と（「思い知らされ感」とでも言ってよいほどの強い感情がある）、だからこそ「子どもにとっては、親の存在や親との関係がかけがえなく大切である」という認識が同時に存在する。そして、あくまでも眼前の子どもの様子や、子どもが引き受けている諸状況や、それらをめぐる子どもの気持ちなどを通して見えてくる親の現実に対して、保育士は関わろうとする。このことは、児童福祉の推進のためには、親支援が重要な柱となるので、独立した重要なテーマとして受け止めた上で子どもへの養育と並行した業務と受け止められるのではないか考えていた筆者の先入観とは少し異なっていた。

あくまでも「子どもの最善の利益」が第一であり、そのための日々の養育活動が本当に大変な業務であろうから、児童養護施設の保育士の受け止めはむしろ自然である。子どもの養育を直接になっていない児童相談所が行う施設入所に伴う親支援は、まず親の側の課題へのアプローチを通して親子関係の改善をめざし、それによって子どもの幸せをめざす志向が強いが、児童養護施設は、あくまでも子どもの先に親を見るのであろうか。そのために、ケース理解やケース処遇の方針検討において、施設と児相との力点の置き所が、利害相反の様な形となって対立しやすくなる可能性は、施設・児相双方によって「不可避な現実的課題」としてもっと認識されてもよいと思われた。そこの所の専門性の確立までを施設保育士の側にすべてを求めるのは酷であるが、親子を結び直すための施設・児相双方の取り組みを相対的に理解した上で、総合的なケース処遇を推進できる為に、a、b で考察した保育士の持つ力量が大きな担保となるのではないだろうか。あるいは、施設の中で一見利害相反となるような両方向の取り組みを更に推進させるためには、現在の施設のマンパ

ワーに、何らかの別機能を付加していくような、別システムを創生していく必要があるのかも知れない。どのような親支援業務と提携すれば、更に現状を打破し発展させることができるのかについて、保育士側からもアイデアを出していけるような「知恵」の涵養が、児童養護施設の保育士にも求められるのかもしれない。

保育士による親への関わりは、子どもの実態を通して親へアプローチされた内容であるからこそ、更に強いリアリティーと信頼性を伴って親に届くという現実があるかも知れない。恐らくは、そのような粘り強い親への関わりを、施設保育士は行っている。ただ、支援結果の受け止めもまた、子ども尺度で行ってしまいやすい弱点を保育士は持つのではなかろうか。その結果を親尺度で評価し直す専門性が、相対的な役割として確立されれば、それが施設保育士の専門性を更に大きく支えることにならないだろうか。

それに対して乳児院の保育士は、施設での養育を進める事と並行して、児童福祉施設の役割として、親子の絆や家庭復帰ということを強く意識せざるを得ない側面を持つのだろうか。「子どもには、本来の実親がいる」「親になりきれない」という施設保育士のジレンマ的な前提が、親子になって間もない乳児期であるからこそ、親子関係の再統合の方向に向かわせるのであろうか。この方向に感受性が強く動く動機の起源は、「子どもの最善の利益」を第一に考えるところから出てくるのだと思われるし、これは児童養護施設の場合と変わりがない。しかし、時には不全感を持ったまま家庭に戻したり、あるいは時が来れば児童養護施設に引き継ぎ、あるいは里親にもらわれていくことを目の当たりにする時、「親代わり」として養育してきた者の子どもへの思いが引き裂かれるようなことにならないだろうか。この矛盾を引き受け乗り越えるために、A保育士は「乳児院は親と子どもを守り、愛着を作る場だと思う」と語る。これが乳児院保育士の持つ専門性を表すキーワードだろうと思われたが、乳児院そのものが持つこのような矛盾をケアする別途の専門性が必要なのかもしれない。

2）対人援助職としての可能性

カウンセリングマインドをスマートに援用しながら、治療的関わりを行うのが「対人援助職」であると規定するならば、入所型施設の保育士とはおよそかけ離れたイメージになる。しかし、職業上の縁によって、「親代わり」という濃厚な立場で、いろんなものを背負いながら成長途上にいる子どもたちとある日を境に生活を共にしながら、その子ら（＝他者）に関与し続ける施設保育士ほど、馬力が必要な「対人援助職」は他になかろう。aでも考察したように、その段階での「子どもの生活世界」におけるできごとを、「親代わり」としてすべて引き受け続けるという時間の流れの中で、子どもの背後にあるもろもろの事情や子どもの関係世界に対して、個別に参与し続けることができるための「自己覚知」と、そこから導き出した自らの「メタポジション的な位置取り」を、保育士自身の「生き様」の中に落とし込まなければならない。これはずいぶん過酷な作業であろうが、対人援助職としての絶対条件の成立が、これらのプロセスの中に含まれてはいないだろうか。また、このような何らかの「位置取り」を見いださなければ、社会的養護の渦の中に飲み込まれ、自らも燃え尽きてしまうようなこともあるような過酷な世界であろう。

そのようなポジショニングが獲得できるには、その過程の中で、bで考察したような「勘所獲得体験」や、基本となる子どもの受容や、その際の気づきやバランス感覚が涵養されてい

なければ、なかなかメタポジションの獲得に至ることができないのかもしれない。そして、養育者が向かうべき「ゴール」の設定と、どこまでも対応を引き受け続ける覚悟と、その時々の他者やTPOなどに関する細やかで相対的な受け止めと、成長が達成できた際の喜びがなければ、担当児童とともに成長することはできないのであろう。たえず揺れ続けながらも、このような道のりを歩み続けることができるために必要な事柄は、先の論文でも述べたような「対人援助者としてのセンス」なのであろうと考える。

a・bで考察した施設保育士の成長過程は、入所施設における対人援助職的な側面を構成する際には、それらは相互補完的に作用するのであろう。そして大事なのは、これらの要素は、施設における勤務実績を通して、子育て体験を具体的に積み上げる中でしか形成されてこないという点である。これは、母親が実際の子育てを通して次第に豊かな母親になっていくプロセスと似ている。だとすれば、はじめから豊かな保育士は存在しないことになる。そして保育士自身が豊かに成長できるためには、a・bで考察した成長過程を各々の保育士がたどることのできる条件が勤務先である施設の中に存在することが、施設保育士の専門性確立のためには非常に大きな要件となる。臨床家はスーパーバイザーによって成長していくのであるが、保育士の成長を保障する周辺の人的・環境的条件の確保は、臨床家の育成とは比肩できないほど豊かでなければならないのではなかろうか。しかし、現下の各施設において、この条件の必要性に対する認識とその整備がどれほどなされ、児童福祉業界内でその必要性がどれほど認識されているのかが気がかりなところである。現在社会問題となっている「施設内虐待」も、このような条件が地道に整備されるところから対処していかなければ、おそらく解消していかないのではないだろうか。また社会的養護は、できる限り家庭に近い形態の元で営まれるのがよいとされており、そのこと自体に何ら異論はないのだが、そこでの養育機能を担う者もまた、これまで考察してきた事柄と同じ課題を背負うことになる。そしてその際に、養育を担う機関が小規模であるほど、養育者の成長を支える機能もまた小規模化・分散化・弱体化しないかというジレンマも感じている。

保育士の役割として、「子どもの代弁者」「親の代弁者」ということが倫理項目として謳われるが、まず最初にこの課題がお題目的に提示されても、本当に有益な代弁機能は何ら実現しないのではなかろうか。a・bで考察した保育士の成長が相対的に進捗する過程で、養育者の中にそのニーズが必然としてわき上がってきたものを、子どもや親とともに成長していく保育士がTPOにそって親や子に「代弁」しない限り、おそらくは相手に真に伝わっていかないのではないだろうか。

5　おわりに

本論は、先の論文とはかなり異なった論調になったかもしれない。稿を閉じるに当たり、対人援助現場の実態がシビアであるほど、その中に存在する対人援助の基調構造を発見し、それを見失わない努力が重要なのではないかと改めて感じている。

入所児の53.4%が虐待体験を有している児童養護施設の現場は、そこに勤務したことのない者にとっては、想像を絶する世界であるのかもしれない。基本的な対人関係や、心の安定基盤が大きく損なわれているところからの「育ちの引き継ぎ」を担う時、肯定的な基盤が一つでも二つでも再創造できるかということの困難性は、臨床心理学の既存の知見からも明らかにさ

れているところである。しかし、そのような子どもも、家庭ではぐくまれる子どもも、育つ喜びを享受すべき同じ子どもたちである。そして、施設保育士は、そのような喜びを子どもたちと共に享受したいがために、「子どもと生活を共にし、子どもを育てること」を引き受けるのであろう。

3 名の保育士から聞き取った内容は極めて豊かな内容を持ち、そのすべてを考察で扱いきれなかった。保育士が創生していくそこでの「生活世界」の内容がどのようなものであるのかについては、聴き取り内容の記述から読み取っていただくしかない。

拙稿を閉じるに当たり、ご協力いただいた 3 名の保育士に心からの謝意と敬意を表したい。

引用・参考文献

・藤岡孝志.（2008）. 愛着臨床と子どもの虐待. ミネルヴァ書房
・児童養護における養育のあり方に関する特別委員会.（2008）. この子を受けとめて、育むために　育てる・育ちあういとなみ（児童養護における養育のあり方に関する特別委員会報告書）. 全国児童養護施設協議会
・柏女霊峰監修　全国保育士会編.（2009）. 改訂版 全国保育士会倫理綱領ガイドブック. 社会福祉法人　全国社会福祉協議会
・厚生労働省雇用均等・児童家庭局.（2008）. 保育所保育指針解説書
・厚生労働省雇用均等・児童家庭局.（2009）. 児童養護施設入所児童等調査結果（平成 20 年 2 月 1 日現在）
・村瀬嘉代子・青木省三編.（2008）. 児童福祉施設子どもの育ちを支える. こころの科学, 137, 13-79 日本評論社
・村瀬嘉代子.（2012）. 養育のいとなみに求められるもの　日々のいとなみに込められた本質的意義. 季刊『児童養護』創刊 40 周年記念誌, 10-15. 全国児童養護施設協議会
・村瀬嘉代子.（2012）. 講座　子どもを受けとめて、育むという営み①　生きる糧の基盤をつくる. 季刊児童養護, 43-1, 34-36. 全国児童養護施設協議会
・柴田長生.（2011）. 対人援助職としての保育士の可能性（試論的検討）　―児童相談所・婦人相談所の一時保護所保育士業務から見えるもの―. 2010 年度心理社会的支援研究, 創刊号, 73-85.　京都文教大学
・柴田長生.（2012）. 保育士が有する対人援助職としてのコンテンツの検討　―専門相談機関に勤務する保育士への聞き取り内容から―. 全国保育士養成協議会第 51 回研究大会　研究発表論文集. 62-63